

夢挽歌

仲根弘樹

信濃の雪は、湿った雪が音もなく降り積もるか、はたまた北風に乗った粉雪が地響をたてて荒狂うか、そのどちらかである。

その日の白樺峠は、春間近もあつてか信濃路で言うところの南からの上雪（かみゆき）。湿った水雪が静かに白い陽炎となつて降り続け、何時もは乗鞍を正面に、右に穂高岳、さらには天に向かつて一気に垂直に伸びる槍ヶ岳を望み、鷹の一種サシバの渡りで知られる信濃路きつての風光明媚な峠道も雪に煙り白一色の時が止まったかのような沈黙の世界。梢に積もった雪はさながら満開の桜を見る思いで、さしもの吉野も弘前もその比ではなかった。

静まり返った雑木林の脇道の中を、かろうじてそれと分かる粗い坂道がくねり、小さな沢にかかった丸木橋を渡ると一軒の朽ち果てそうな茅葺の家が墨絵のようにぼつりとあつた。

突然、梢が激しく揺れ、雪が白銀の粒となつて辺りに飛び散り一羽の白鷺が沢に舞い下り、湧き水の淵に顔を出した薄黄緑のふきのとうの若芽をついばんだ。

まどろんだ老婆が目を覚まし、夜の帳が下り始めた窓外に目を移し、消えかかった囲炉裏に小枝をくべた。一瞬、煙が立ち、梁が剥きだしの煤けた茅の隙間に消え、老婆の顔がほのかに明るくなった。

梢の雪のすべり落ちる音にまぎって、玄関の潜り戸をかすかに叩く音がした。

老婆は怪訝そうに腰を伸ばして立上り、しんぼり棒を外して潜り戸を開けると、そこには頭からすっぽり雪を被った老婆の息子が立っていた。

老婆は驚いた。

息子は新潟県姫川支流の小滝川の河川工事の飯場に居て、この時期は帰るはずがなかった。

「どうした、何かあつたんか？」

老婆はとっさに息子が今流行のリストラにあつたのかと思った。

「大町市の鹿島川に次の仕事の打合せに……。一夜の暇ができたので母ちゃんに会いに……」

老婆は安堵の表情を浮かべ息子の手を引き、

「ともかく中さ入れ！ 寒かつたらう……」

と囲炉裏に上がり多量の小枝をくべた。

息子は雪を払い、潜り戸を体をすぼめて潜り、懐かしそうに家の中を見回し、長靴を脱いで囲炉裏に上り、老婆の前に座り囲炉裏の火に手をかざした。

老婆は茶道具を息子の脇に置き、
「茶でも飲んでくれ……」

と囲炉裏の自在鉤も吊るされた鉄瓶の湯を茶葉を入れた急須に注いだ。

「夕飯まだずら……何にする？ 何にだって言ってもこの雪だ、もう幾日も下におりれん。昨年
のワラビの塩漬か干茸しかないが……」

と忙しく土間の台所を動き回った。

「何もいらん、残り物で……」

と息子は防寒着のポケットから薄黄緑のふきのとうの若芽を取り出し、

「下の丸木橋の日溜りが当たる所に咲いてた……」

と囲炉裏の端に置いた。

老婆は手を伸ばし、ふきのとうを握り、匂いを嗅いで、

「あの沢は湧き水で春が早い……。あそこからふきのとうを採ってくるのが子供の頃からお前の
役目だった。いつも通りのふき味噌にでも。父ちゃんもお前もふき味噌が好物で……」

と目を細め、ふきのとうを大事そうに流しに置き、土のクドに飯釜をかけ、

「大町市は何の仕事だ……。黒部ダムの関係か」

息子は一瞬顔を曇らせ、

「砂防ダムの補修、来月からだ……。黒部は関西電力で関係ねえ……」

「そうか、それは良かった。大町なら同じ県内でちよくちよく帰ってこれるよな……」

老婆は嬉しそうに顔を輝かした。

「奈川渡から歩いて来たんか？」

「うん、歩くしか他に手段がないんで……。土産も持たずに……」

「土産を持つての三時間の雪の山道歩きは大変だ。元気な姿が何よりの土産だ。新潟は今月かぎ
りか」

「うん、三年近く働かせてもらったが……」

「無事でよかった。毎日が気でねかった、いつ事故や雪崩が起きるか……。危ねえ仕事だ
で……」

「今はそれほどでも……。親会社も法律上それなりの防災してるし。親会社たって監督を出す
だけで仕事はすべて下請けか俺らのような孫の孫受け……」

老婆は安心したように飯釜のクドに薪をくべた。

ほどなくして飯が炊き上がり、老婆は戸棚から一人用の食膳を二つ取り出し盛り付け、「五人前
あつた食膳も今では二人前で足りる……」

と寂しく笑い、息子の前に食膳を置いた。

「ふき味噌もあるで一本付けるか……」

「酒、用意してあるんか？」

「うん、お前がいつ帰って来てもいいように酒だけはな……」

息子は嬉しそうに囲炉裏の火を見て、

「石油ストーブも電気釜も買ったに使わんのか……」

老婆は苦笑し、囲炉裏に目を落とし、

「やっぱ薪が一番だ。生まれた時から薪の火で育ってるで……。薪なら近くに枯木があるし只だ……。それにここまでは石油屋もなかなか持つてこんで……」

老婆は酒瓶の封を切り、とつくりの酒を鉄瓶に入れ、自分の食膳を運んだ。ほど良く爛ができ、老婆はとつくりを息子の食膳に置き、

「盃より湯呑みの方がいい。飯場は飲べえだらけだで……」
と湯呑みを囲炉裏の端に置いた。

「今夜は一緒に飲もう……」

「いけねえ……。オラは酒は……。知ってるだろ……」

老婆は手振りをまじえて断った。

「何時もはそうだけど今夜だけは……」

息子は両手を合わせて懇願した。

老婆は照れ臭そうに、

「なめるだけだぞ……」

息子は酒を注いだ湯呑みを老婆に渡した。

老婆は一口飲み顔をしかめて、

「いけねえ、いけねえ、もう酔った……」

と息子に湯呑みを返した。

息子は湯呑みごと老婆の手を握り締め、

「長生きするんだよ……」

と涙を浮かべた。

老婆は息子の涙に気付きながらも気付かぬ振りをして、

「お前に苦勞をかけての長生きは迷惑な話だ。この春には八十三歳だ、もう充分生きた。毎月の仕送りだって大変だ……。俺（オラ）が居るばかりに嫁も貰えずすっかりお前を不幸にしてしまった。すまないと思ってる……」

と鼻をすすり、囲炉裏に目を落とし、消えかかった囲炉裏の火を鉄箸でかき回し、背中を丸めて小枝をくべた。

息子は老婆の丸くうなだれた背中を垣間見て、湯呑みの酒を一气飲み、声を張り、

「何を馬鹿なことを言っとる！ 誰かの為に働けるって最高の幸せで苦勞とは思わんものだよ。」

俺の他にも北海道の校別の施設に痴呆の親を残し出稼ぎに来てる人とか、身体障害者の弟の為に働いている人など飯場にはいろんな人が居て、それぞれが不孝を背負いながらも懸命に生きてる……。俺なんかまだ幸せの方だ……。俺は母ちゃんの子だったことが何より幸せ……」

と老婆に微笑んだ。

老婆は息子の微笑みに少しほっとした表情になった。

「でもな……。せめて高校ぐらいは出してやりたかったが親に甲斐性がなかったばかりに高校にも出せず人が嫌がる下端仕事ばっかで……」

息子は湯飲みを注ぎ溜め息を付いて、

「高校なんてここでは通えん……。もっとも近い波田町の梓川高校までもこの白樺峠からは三時間もかかる。下宿するつたってそれなりの金がかかる……。親の甲斐性の話だけではないよ……」

と手を伸ばし、小枝を握って二つに折り、囲炉裏にくべた。

「母ちゃんだって介護保険払うだけで何の役にも立たん……少しでも使えたら俺も安心なんだけど……」

「……そうだな、ここまでは来てもらえんし、どんな施設があっても町場まで行く事もできん」「過疎地では、もう暮らせんようになつとる……。町に出んかぎりは……」

「町に出るにはまとまった金がいるし第一ここには先祖の墓もある……」
と梁に吸い込まれる煙をぼんやりと目で追い、

「……昔は良かった。どんな過疎地でも桑を作り蚕を育て薪を売りそれなりに暮らせたが、今は何もかも昔からあった仕事が目なくなった。もう少し炭作りの仕事が続いたら、ここで前と暮らせたに……。一昔前に戻りてえなア……。昔は人でごった返していた……」
と顔をしかめて唇をかんだ。

老婆が懐かしむように、当時はどんな辺鄙な山地でも桑の木を植え蚕を育て精米研ぎが女の仕事。白樺峠のひとつ南の野麦峠は、春繭の頃には飛騨から多くの人が信州に出稼ぎに来、秋繭が終ると新雪を踏み分け飛騨に帰り、峠道は信州飛騨の幹線道路、人の往来も多く、また炭は炭で男の仕事、石油のない頃は煮炊き暖房の主役で材木業者も多く、川に流した木材集積地を「渡(ど)」といい、本流の梓川に流れ込むそれぞれの川の名を付けて「奈川渡(ながわど)」、「前川渡」、「黒川渡」、「寄合渡(よりあいど)」、「上高地にもっとも近い「沢渡(さわんど)」と、問屋場、旅籠が立ち並び人々の生活を支え、民はおろか国そのものが自給自足でまかなっていた。

老婆と息子も先祖代々延々と白樺峠での炭作りを生業としてきたものの、ここわずか数十年で事態は激変、炭も精米も基幹産業から転げ落ち、かろうじて残った現金収入の「山女(やまめ)」、「岩魚(いわな)」の川魚漁も幾つもの電力ダムと水利権で奪われ、自然に生きる山菜も入会権が設定されて入山できず自家用がやつと……。遠くから眺めるだけの風景ならともかく、足元は権利権利でがんにがらめ。川の小魚、小石一つ、ワラビ一本もままならずでは生活が成り立つはずもなく峠を下る人が続出、時の流れに取り残された老婆と息子だけが白樺峠に残った。

老婆は息子が出稼ぎに旅立つ度に、ここに残った判断が大きな罪を犯したような気がして、峠を下り立去る息子の背にある種の負い目を感じ、息子の方は息子で一人峠に残る今の母の境遇が自分の至らなさからと負い目に思いながらも、互いが口に出すことはなく、形の違う負い目はそれぞれ秘密事項となっていた……。

老婆は気を取り直して湯呑みに酒を注いだ。

「腹一杯飲めよ、今度何時会えるか分からん……」

と息子の顔を見て寂しそうな表情をした。

息子は苦笑し、湯呑みを手に持ち、

「母ちゃんも……。もう一杯……」

老婆は手振りで断る素振りをしながらも嬉しそうに息子から湯呑みを受け取り、

「ちよつとだけな……。父ちゃんの二の舞はゴメンだ。あれほど『飲むな！』って言ったに炭焼小屋で脳溢血……」

「山の中の炭作りだ。飲まずにはいられん。工事現場の飯場と一緒に……。決して酒が好きなわけ

ではない、酒で寂しさを消してるんだ。酔えば寂しさも辛さも一時忘れる。俺だって母ちゃんと一緒に居たい……。けど、こうするしか生きるすべがない……」

と下を向き目頭を押さえた。

老婆は酒の残った湯呑みを息子に返し、

「お前も酒には気を付けて体をいよ……」

息子は湯呑みの残り酒を一気に飲んで、

「……俺は母ちゃんの事が心配だ」

「俺は大丈夫だ。雲が消えたらワラビやタラの芽採りで忙しい……」

「入会権なくともいいんか……」

「こんな年寄りだ、大目に見てる。入会権以外の場所もあるし……」

「少しは金になるんか？」

「峠を越えた向こうは乗鞍高原だ。民宿や土産物店が何軒かあるで小遣錢ぐらいはな……」

と得意顔、囲炉裏に小枝をくべた。

「山菜が土産にねえ……。土産になんかなるんか？」

「なるさ、大人気だ……。都会の連中には何よりの土産だ。昼には売り切れる。『もつと持ってきて』って言われるがこの年だ……。境峠（さかいとうげ）を越えた木曾の方ではこれを商売にして家を建てた人も居るって話だ」

と息子を覗き見て、

「実はな……。お前も飯場での仕事を辞めて山菜採りや秋の茸採りしたらどうかと思つて。もうお前だって若くねえ……。いつまでもダム工事ってわけにもいくまい……」

と白髪のまじった息子の髪に目を落とし溜め息を付いた。

「山菜や茸で生活費稼げるんか？」

「何とか暮らせるって……。下の奈川温泉でも品物がなくて困ってるってことだ。なんせ山菜採りは年寄り仕事であてにならん。森林組合でも誰かさがしてるって……。どうだ、お前やってみんか！ お前なら白樺峠は庭のようなもんだで……」

息子は少し興味を持った。

それで母と暮らせるなら願つたり叶つたり。息子は身を乗りだしたが溜め息を付いて肩を落とした。

「入会権はどうする……。母ちゃんの食べるだけなら大目に見ても商売で採るとなると……」

老婆は膝を叩いた。

「入会権なら大丈夫だ！ 買える……。そう思ってお前からの仕送りをな……」

と腰を伸ばして立上り襖を開けて次の間に入り通帳を手にして囲炉裏に座り、

「毎月少しずつ積んどいた……。心配ない……」

と通帳を息子に見せた。

息子は通帳に目を落とし、

「……こんなにも」

「お前が苦勞して稼いだ金だ。一銭なりとも無駄にはできん。役立つ時が必ず来ると思つていた……」

息子は通帳を囲炉裏の縁に置いた。
老婆は通帳を大切そうに懐にしまい、

「なア……。お前も五十才を越えた……。そう飯場での仕事ができるわけもない。貧しくたっていいじゃんか……。親子一緒の方が……。飯場での仕事はいつ事故が起きるか分からん。今まで元氣だったのが幸せと思っでここで俺と一緒に……」

と息子に両手を合わせた。

息子は照れ臭そうに火箸で囲炉裏の灰をかき回し、

「変な話だな……。山菜なんて前は土地の者の保存食。それを都会人が拵（せせ）って買うなんて……」

「贅沢な暮らしに慣れて粗末な物が珍しく感じるんだらう……。ここらまで遊び気分入り込み山菜どこか植えた苗木まで引き抜き持って行く……。困ったもんだ……」

「山には山主（やまぬし）、国有林は入札……。すべて他人の物でそれなりに手入れしてるのに、自然の物はすべて無料で只だと思ってる。都会人は馬鹿だけど無邪気で可愛い……。以前松ぼっくりを『パイナップルの子供だ』って言っでた小学生がいた。俺もここで暮らして都会人の相手でもするか……」

老婆は身を乗り出し、今まで見せたことのない嬉しそうな顔をして息子の手を握り、

「本当か！」

息子は少し戸惑い、照れ臭そうに、

「うん……。そうする……。この春戻ってくる……」

老婆は安堵の表情をして肩を下げ身を丸くして、

「今年の春は二人して御殿桜が見れるなア……」

と目を細めた。

白樺峠には山桜の変種、薄桃色の御殿桜が二千本近く自生し、白銀に輝く残雪の乗鞍岳を背景に幽玄な美しさをかもし、山里に春の到来を告げていた。

「……うん。何十年振りか二人で見れる」

ぼそりと呟いた息子の顔に一瞬戸惑いにも似た暗い表情がよぎった。

老婆は息子の表情に気付かず、

「前祝いだ！ 今夜はとことん飲むか……」

と立上り、

さくら、さくら

やよいの空は

見渡すかぎり

かすみか雲か

匂いもいずる

いざや、いざや

見に行かん

と口ずさみ、囲炉裏端の床板を外し、中から酒瓶を取り出し、息子の横に置いた。

「もう一升、買い溜めてある……」

と封を切り、とつくり注ぎ、鉄瓶に入れ、

「俺が得意の『さくらの唄』を聞かせるのはほんに久し振りだ……」
と盛んに照れてはにかんだ。

「たんと飲めよ！ まさか、秀綱様が化けてるってことはあるめえなア……」
と息子の顔をいとおしくなせた。

秀綱様とはこの地に残る伝説で、天正一三年の冬、飛騨松倉城主、姉小路自綱が金森長近に攻められ落城寸前、新婚まもない息子秀綱にお家存続の命運をかけ秀綱夫人の信濃淡路城に落ちのびさせる途中、雪に埋まる白樺峠を越えた麓のこの地で、匿われもてなされた礼に別れ際、麻袋から金の小粒を茶碗一杯差し出した……。

これが不運を招いた。

金の粒に目がくらんだ地元民は秀綱一行に襲いかかり惨殺、追いつめられた秀綱は金の粒もろとも「この金すべて石になれ！」と絶壁から深い淵に身を投げ、淵は黄金色に染まり、地元民が競って淵に下り金の粒を拾うとそれらはすべて石になり、その後、地元民は次々と悪病にかかり集落は全滅、淵は「秀綱淵」と恐れられ、今もって秀綱は雪の夜、人に化けて現われると信じられていた。

その夜、老婆は粗末な布団を二組囲炉裏縁に敷き、酔いも手伝ってか息子に見守られ安心しきったように寝入った。

いつしか雪は止み、漆黒の空に星が煌めき、ほのかな明かりが周囲の山々を青白く浮かび上がらせた。

夜が白々と明ける頃、激しく潜り戸を叩く音に老婆は目が覚めた。

すでに囲炉裏の火は消え、一緒に寝たはずの息子の布団はそこにはなかった。

老婆は不思議そうな顔をして首を傾げ、急いで潜り戸を開けると、そこには数キロ下の黒川渡の駐在所のおまわりが立っていた。

「大変だ！ 息子さんが事故で亡くなった……」

老婆は苦笑した。

「……そんな縁起でもねえ冗談はよしとくれ……。息子なら夕方帰ってきて明け方発ったかと……」

「馬鹿なことを……。昨日の夕方、新潟の工事現場で土石流に六人が飲み込まれ、今朝方全員本流の姫川で遺体となって発見された……。夕べの大雪で電話線が切れてつながらなくて俺が歩いて知らせに……」

老婆はそれでも信じられなかった。

老婆は囲炉裏に駆け寄り、部屋の障子を荒々しく開け、家の中をくまなく捜し、力なく戻ってきた。

「夕べ……確かに息子がここに……。二人で一杯飲んで……」

と戸棚の酒瓶を取り出した。

酒瓶の封は切れてはいなかった。

老婆は床板を外し中を覗き首を傾げた。

「そうだ！ ふき味噌。ふき味噌を作って。息子が下の沢で採ってきて……」
と狂ったように小皿を捜した。

おまわりはそんな老婆を哀れみ、

「息子に会いたい……会いたい……の気持ちが強すぎ、そんな夢を見たんだ……。しつかりしましよ！ 息子は確かに死んだ！」

老婆はへたり込んだ。

「……夕べのことは一夜の夢、さくらさくらの唄は息子への挽歌だったのか……」

老婆はよるめくように潜り戸の外に出た。

雪の積もった梢が朝日に輝き、融けた雫が黄金の粒となって老婆に降りそそいだ。

老婆は朝日に向かって叫んだ。

「信夫、帰ってこい！ 俺と御殿桜を見るて約束したじゃんか！ 俺一人を残して！ 信夫！
帰ってこい！ 白樺峠に帰ってこい……」

と積もった雪に倒れ込み、両手で激しく雪を叩いた。

老婆の血を吐く叫びに一羽の白鷺が木々を揺らして舞い上がり、茅葺屋根をかすめ、紺碧の白樺峠の空に吸い込まれて消えた。